

果たして戦後が終わったのか

—日本戦後文学史読み直しへの試み—

Ahmed MOSTAFA

太平洋戦争が終結して61年という長い年月が経っている。あの戦争が終わってからかなりの時間が経ち、当時の人たちのほとんどがもうこの世にはいないだろう。しかし、「戦後」はどこで終わったのか、いや、「戦後」は本当に終わったのか」という問いを抱きながら戦後文学を考えるとたいへん重要な課題に直面する。そこで「戦後文学」を論じることは甚だ難しいことになるのではないかと思われるのである。今までの日本のいくつかの世代の小説家たちはこの戦争そのものと日本の“戦後”をどのように据えてきたのか、について考えてみると、私にとってこのテーマは広すぎていっぺんにまとめられない。したがってこのタイトルの講演会では、「戦後はもう終わった」というふうに片付けてしまふ日本戦後史の歴史評論家そして日本文学史の評論家はどのような意味で“戦後”という言葉を使っているのか、またその意味において“戦後の終わり”の区切りをどこに置いているのか、という歴史的で、文学史的な視点から考察してみた。

文字通りで言えば、“戦後”というのは、「戦争が終った」という意味になるとごく普通に思われる。日本の場合は、おそらく1945年8月15日の正式な終戦宣言の時点から、日本の“戦後”は始まるのではないかと思う。

それでは、日本の国語辞典や百科事典では“戦後”という言葉はどのように紹介されているのか。いくつかの例を調べたら、だいたい次の定義ができた。「戦後」とは、戦争の終結後の期間をさす。現在の日本では、第二次世界大戦後の意味で用いられることが多い。戦争では多くの破壊が行われるため、戦争が

終結した後は、社会体制などが新しく作り直され、価値観まで変化する。このため、大きな戦争を一つの時代の区切りとして、戦前・戦後という呼び方をする。1956年の経済企画庁による「経済白書」で「もはや戦後ではない」という言葉が使われ、流行語になった。しかしながら現在においては、この短期的な戦後の定義を念頭において発言がされることはなく、1945年8月のポツダム宣言受諾を受けた玉音放送以降、現在にいたるまでの昭和ならびに平成の時期を総称して“戦後”という言い方が一般的である。

以上、日本の辞典における“戦後”は明らかに「日本の敗戦」を想定して定義されている。

日本はその戦争で、軍人も民間人も合わせて310万人ぐらいの人が戦死してしまっている。また、日本の大都市はほとんど空爆によって焼け野原になってしまい、人類史上はじめての最大の大量殺戮兵器である核爆弾の計り知れない被害を受けてしまったのである。沖縄の沖縄激戦でも広島や長崎に負けないぐらい軍、民間人合わせて19万人ぐらいの犠牲者を出している。さらに、太平洋戦争が終結してすぐ日本はアメリカに占領されてしまったのである。これは日本が有史以来はじめての外国勢力による侵略及び占領を受けることである。それまで、日本はいわゆる“神の国”でカミカゼに守られていて絶対他民族によって侵略されることはない、というふうに硬く信じられていた。しかしこの神話は崩れてしまい、思ってもいなかった事態が生じてしまった。これは日本の“戦後”を考えるのにとても大きな要素だと思われる。

近代史において、敗戦によってこんなに重なり合った深刻な災いを蒙った国は珍しいのではないかと思われる。数十年にわたって中国や朝鮮半島をはじめ東南アジアや南太平洋で加害者であり続けた日本は、あっという間に被害者の立場に打って変わったわけである。日本国民にとっては思いがけない状況の中でこのように日本の“戦後”が始まるのである。すなわち、日本にとってはこれはただの“戦争が終った後の戦後”だけではなく、むしろこれは“負けてからの戦後”であり、“被占領国家の時代の始まる戦後”であり、“骨抜きの主権

国家の戦後”であり、“天皇の存在が曖昧な状態の戦後”であり、“まったく先の見えない戦後”であった。

このような混沌とした状況の中でいわゆる“日本戦後文学”がスタートするわけである。一般的には“日本戦後文学”という用語を戦後からすぐの時期から現在までだいたい10年毎に区切りをつけて展開している。それが、第一次戦後派・第二次戦後派・第三の新人・第四の新人・内向の世代・両村上の世代・ボーダーレス世代、そしていわゆる「オンライン・電子文学の世代」とだいたい区切られるのである。しかし、これはどちらかといえば、終戦後に書かれたあらゆるジャンルの小説のことであって、必ずしも敗戦がもたらした直接あるいは間接的な諸々の意識を含んだ小説とは限らない。掘ってはこれらをひっくり返して“戦後の文学”もしくは“戦後の小説”と呼んでも差し支えがないと思う。一方、逆に敗戦の後遺症を含めて、敗戦がもたらした直接あるいは間接的な諸々の思いを含んだ小説もしくは文学のことを“戦後小説”もしくは“戦後文学”と呼んだ方が妥当ではないかと思う。この意味においては“戦後の文学”はずっと敗戦期の時点から今日まで、そしてこれからしばらく続くであろう。一般的に知られている歴史的な意味の日本の“戦後”に添っていけば“戦後の文学”とは少なくとも昭和の終焉までの45年の期間、強いていえば今日にいたるまでの期間をカバーしているのであろう。それでは、日本戦後文学は“戦後”をどのようにとりあげたのであろうか。そして、果たして日本戦後文学においては“戦後”に終止符が打たれたと言えるのであろうか。実はこれをめぐって私は日本戦後文学が抱えている幾つかの問題点をあげたい。

1. 日本戦後文学はテーマから見て“戦後文学”ではなくむしろ“日本の戦後文学”であること。
2. “戦後文学”の“戦後”の本当の意味はむしろマイナス思考の意味に限るべき。

1956年の経済白書に載った“もはや戦後が終わった”という表現を参考にしても日常的に今まで日本で使われた同じ表現を参考にしても、“戦後”という言葉

が内包する意味はただ“戦争の後”という表面的なものではなく、むしろ“敗戦の後の苦しみ”もしくは“敗戦の後遺症”というフレーズの意味を指しているような気がする。日本人が度を重ねて色々なシチュエーションで肩の荷を降ろすような感じで吹き出す“もうこれで戦後が終った”という言葉はまさか戦後まもなく好んで使われた“これで解放が終った”とか“これで民主主義が終った”などのような楽観的でプラス思考の意味を指しているとは到底思えない。

3. 戦争を取り上げた小説がすべて“戦後小説”とは限らない。

“戦後派”というフレーズが日本文学史に定着しているようであるが、果たして戦場の体験を題材にして小説を書いただけでこの作品が“戦後小説”というジャンルに無条件に片付けられてもよいのであろうか。ただ日記のような気持ちで戦場で見聞きした情景を書いても本当の深くて切実でネガティブな意味の“戦後”が伝わるのであろうか。重要なのはむしろ、戦争という一個の極限の状況が、作家たちの精神にどのような変貌をもたらしたかということであろう。

4. いわゆる“戦後派”世代の文学は本当の意味の“戦後文学”ではなく、むしろ“過渡期の文学”のではなかろうか。

元プロレタリア文学作家や老大家、そして第一次戦後派及び第二次戦後派が活躍し始めた時期は、終戦からだいたい1951年から1952年までの6、7年の間とされているが、考えてみれば、それがちょうど日本はアメリカの占領下に置かれていた時期でもあった。現に当時のGHQの厳しい検閲体制のもとですべての出版物が細かくチェックされたし、アメリカ批判はさることながら、太平洋戦争の正当化、戦争中の日本兵による玉砕の賛美や評価などはタブーであった。またそのときの政治的な混乱、社会的及び経済的な混乱や混沌とした状況を併せて考えた場合、健全で自分の気持ちに正直な文学創作活動が到底できるような環境であったとは思えない。第三の新人と呼ばれるグループが現れた時期は、すでにアメリカの正式な占領体制がほぼ終わっていて検閲体制も緩和されてきていたし、敗戦から6、7年も過ぎていたので、少しは冷静な眼差しで、戦争そして敗戦の展望が前の戦後派世代に比べて見え始めてきていたはずである。いわゆる“戦後派世代”

の文学は芸術的にすぐれていても、本当の意味の“戦後文学”としてはまだ過渡期的なもので成熟するには時期が早かったのではないかと思う。

5. 沖縄出身の若き作家が沖縄戦の記憶を未だに語り続けているのに、どうして日本の戦後文学における真の意味の“戦後文学”が終ったと言えるのだろうか。

時間が経てば経つほど経済大国である日本の国際社会に対する貢献や積極的な役割が問われてくる。そこで日本は国際舞台に出れば出るほど眠っていたはず、葬ったはずの戦後の記憶に次々ぶつかってしまうのが現状ではないだろうか。時間が経てば経つほど、そして戦後の新しい世代が登場してくることによってあの戦争の記憶が薄れていくのではなく、むしろ今まで見えなかったものが返って鮮明に見えてくるようになるだろうし、日本を離れて遠く行けば行くほど、日本の姿も今までとなくはっきり見えてくるはずであろう。そのとき初めて日本戦後時代にはどのように終止符を打てばいいのかという別の視点からの歴史的な批評の努力が始まるであろう。

ここでは日本文学者の出番が問われるであろう。このような国際情勢の中の日本を見る場合、太平洋戦争や敗戦時代の清算されなかったツケが次々回ってくることに気づかれることであろう。したがって“戦後”が終っていないことをこれで確認できることであろう。戦後の歩みとともに、戦後の文学も左右された部分が多い。今や戦後史の認識が変わりつつ中で、戦後文学が取り上げられるような新しい材料が見つかるはずである。いままでの日本中心のローカルで狭い視点を変えて、他人の目を借りて立場を変えてあの戦争や戦後日本を見つめなおせばきっと“戦後文学”の新たな展開が望まれると思う。

“戦後文学”の終焉を宣言するにはまだ道程が遠いような気がしてやまないのである。